

## 安野光雅さんと鷗外訳「即興詩人」

長谷川 修

安野光雅さんが昨年暮れに九四歳で亡くなった。新聞の追悼記事では絵本作家、画家、装幀家として、「国際アンデルセン賞」（絵本のノーベル賞）の受賞や皇居の草花のスケッチで上皇太后様との親交が報じられた。ただ私の見落としてもいけないが、氏の文筆活動に触れた記事が少なかったのは残念な気がする。氏は読書家にして名文家で書評集やエッセイ集を何冊か出しており、「ちくま文学の森」シリーズでは、森毅、井上ひさし、池内紀と共に編者を務めた。

安野さんの最大の愛読書は、郷里津和野町の大先輩である森鷗外の訳した「即興詩人」だ。氏には「即興詩人」三部作として、「即興詩人の旅」（イタリア紀行とスケッチ集）、「繪本即興詩人」、「口語訳 即興詩人」がある。三作目の口語訳は、鷗外の文語訳を易しい日本語に変えたものである。氏は「格調が高くリズムの良い鷗外の文語雅文体を味わってほしいのだが、もはや若い人には難しすぎるので、鷗外訳への踏み台に」と口語に訳した。

「即興詩人」はアンデルセンがイタリア留学中の見聞に基づく半自伝小説で、原作はデンマーク語だが、出版時は欧州中で評判となり各国語に訳された。鷗外訳はドイツ語からの重訳で、懂れながらもイタリアの地を踏むことのなかった鷗外は、当時の日本語の語彙にはなかつたキリスト教の慣行や建造物、南欧の植物や食物の訳語等に苦心しながら、九年の歳月を注いで和文に移した。訳文は「原文（ドイツ語）よりも深く美しい日本語」（小泉信三）、「鷗外以降の人にはもう書けない雅文」（三島由紀夫）と称された名文で、大正・昭和初期にローマに渡った学者や文学者の多くは、鷗外訳「即興詩人」を携えた。

安野さんは小学校の絵画教師のかたわら一人で画業の研鑽に励み、絵本作家として自立したのは四十歳を過ぎてからだ。氏独特の心を和ます淡彩画や美しい造本は、多方面に活躍したその生涯とともに永く人の心に残るであろう。ご冥福を祈る。